大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館ニュース

No.1
Autumn
2005

『文正草子』
塩焼きで財を成し、栄華を極めた文正を主人公とする
お伽草子。（室町物語）

目　次

■発刊に当たって ……2
■イベント情報 ……3
人間文化研究機構連携展示
歴博・国文研　共同研究フォーラム
ソウル研究交流集会
第29回　国際日本文学研究集会
■お知らせ ……4
閲覧時間の延長について
立川市への移転について
■寄贈・寄託図書等の紹介 ……5
校本うつほ物語草稿
坂田穏好氏蔵古筆切コレクション
【新収コレクション紹介】懐風弄月文庫
リプリント日本近代文学の創刊
■館長海外往来 ……6
■トピックス ……7
子ども見学デー
アーカイブズ・カレッジ
■コラム「古今・新古今の秋」 ……8

国文学研究資料館ニューズ発刊に当たって

国文学研究資料館は、発足したのが1972年（昭和47）5月ですから、既に32年の歴史を刻んでまいりました。日本は奈良時代以来今日まで、数多くの文学作品を生み出し、様々な内容の記録を残してきました。これは世界に誇る文化遺産なのですが、過去においては戦乱のために焼失し、度重なる災害に遭遇して失った資料も膨大なものがあるでしょう。国の機関として、国内外に存するそれらの資料をことごとく調査し、せめてマイクロフィルムによって永久保存を図り、さらに紙焼写真などにすることによって、自由に研究できる環境を作ってほしいというのが、長い間の研究者たちの夢でもありました。

そのようなミッションのもとに、全国の研究者に献身的な努力をしていただき、これまで17万点余の資料をマイクロフィルムで収集し、調査に至っては海外も含めると1,300箇所をはるかに超える状態にあります。そのほか、古典文学作品の原本、歴史史料を収集し、データベース化して配信するほか、閲覧に供しているところですが、訪れる方々も多く、さすがに30年という歳月の努力のたまものと感謝しているところです。

国文学研究資料館も30年余の年数を重ねていきますと、資料の収集のほか、様々な新しい事業を展開し、共同による研究成果も出されております。それが昨年から始まった１３の研究プロジェクト（うち５本は館外の研究者も参加しての共同研究）であり、公募による共同研究の発足です。ほかにも外国人研究員を中心とした共同研究もなされているなど、日本文学やアーカイブズの先導的な研究機関を目指して活発に活動を続けております。そのような様々な活動の現況を知っていただきたく、また研究者とのコミュニケーションを図るために、「国文学研究資料館ニューズ」を発刊することにしました。

国文学研究資料館ではこれまで以上に、できるだけ多くの国内外の研究者との交流の場にしたいと願っております。その一助としての役割が本ニューズであろうと思い、当分は季刊誌として出し続けるつもりです。
どうか、ご愛読いただき、様々なご意見をお寄せくだされば幸いです。

館長　伊　井　春　樹

国文研正門

イベント情報

人間文化研究機構連携展示

うたのちから

－古今集・新古今集の世界－

本年（２００５年）は、『古今集』が編纂された延喜５年（西暦９０５年）から１１００年目、『新古今集』が編纂された元久２年（西暦１２０５年）から８００年目の年になります。

この記念の年に当たり、当館は、国立歴史民俗博物館と連携し、『古今集』から『新古今集』までの文学史をたどる特別展を開催します。

なお、展示品のうち、懐風弄月文庫の古典籍約３０点は、近年当館所蔵となったもので、今回が初公開となります。

また、合わせて「図録（国文学研究資料館編）」も1,000円にて販売しています。

開催期間：平成１７年１０月２８日（金）～１１月１８日（金）
開室時間：１０：００～１６：３０
※土曜・日曜・祝日は休館日。【ただし、１０月２９日（土）・３０日（日）は開室。】

会　　場：国文学研究資料館　２階展示室　＜入場無料＞

開催期間中、展示の解説（ギャラリートーク）を行います（参加無料）。
御希望の方は、下記の日時に国文学研究資料館２階展示室に御参集ください。
（参加者多数の場合は、入場をお断りする場合があります）

１０月３１日（月）15:00～（４０分）　田渕句美子（国文学研究資料館教授）
１１月　８日（火）15:00～（４０分）　小川剛生（国文学研究資料館助教授）
１１月１０日（木）15:00～（４０分）　落合博志（国文学研究資料館助教授）
１１月１６日（水）15:00～（４０分）　久保木秀夫（国文学研究資料館助手）

お問い合わせ先：事業課企画係（内２５１）まで

歴博・国文研 共同研究フォーラム

和歌と貴族の世界

日　　時　：　平成１７年１１月３日(木・祝)　１３：００～１６：３０
場　　所　：　東商ホール(東京商工会議所４階)＜入場無料＞

連携展示に伴い当館は歴博と共同のフォーラムを開催します。
和歌と貴族の世界をテーマに、古代から中世にわたる諸問題を、国文学・歴史学両面の立場から議論していきます。

申込方法：往復ハガキまたはE-mailにて、「歴博・国文研共同フォーラム参加希望」と明記の上、住所・氏名・年齢・電話番号を記入し、10月19日（消印有効）までに下記にお送りください。（応募者多数の場合は抽選となります。）

〒285-8502　千葉県佐倉市城内町117番地
国立歴史民俗博物館　サービス・普及係
E-mail：forum@rekihaku.ac.jp

※国文学研究資料館では受付を行っていません。

ソウル研究交流集会

日韓友好４０周年を迎えた今年、当館は、両国における人と文化の長い交流の伝統を振り返り、将来に向けて新たな文化的、学術的交流の展望を開くことを目的として、ソウルで研究集会を開催します。

全体は「対話と旅」をテーマに、両国の研究者による講演・研究発表・シンポジウムによって構成され、一般の聴衆にも配慮した内容となっています。＜参加無料＞

日時：平成１７年１１月６日（日）　9:30～

場所：国際交流基金ソウル日本文化センター
（大韓民国ソウル特別市鐘路区新門路
１街２２６　興国生命ビル３Ｆ）

お問い合わせ先：総務課研究協力係（内２１１、２１２又は kenkyo@nijl.ac.jp）まで

第29回　国際日本文学研究集会

29th International Conference on Japanese Literature

「海外から見た日本文学の研究」
－内と外をのりこえて－

当館では、日本文学研究者による研究発表・講演・討議により、広い視野からの日本文学研究の進展を図り、研究者相互の国際交流を深めるため、第２９回国際日本文学研究集会を開催します。

日程：平成１７年１１月１７日（木）～１８日（金）
会場：国文学研究資料館　大会議室＜入場無料＞
参加申込締切：平成１７年１１月１０日（木）

申込はレセプション参加（参加費1,000円）の有無を記載の上、郵送もしくはFAXまたはE-mail で国文学研究資料館内「国際日本文学研究集会事務局」（FAX：03-3785-7266
E-mail：kikaku@nijl.ac.jp）まで

お知らせ

閲覧時間の延長について

当館では、従前から利用者の要望が強かった閲覧時間の延長について、平成１７年８月１日から閲覧室の開室時間を１時間延長し、夕方１８：００まで利用可能としました。

またこれに伴い、閲覧請求受付時間を３０分延長し１７：００まで、複写の受付時間を３０分延長し１６：００までとしました。

当館は今後も利用者のサービス向上に努めたいと思っていますので、ご意見をお寄せいただければ幸いです。

●立川市への移転について

当館は平成１９年度に東京都立川市緑町に移転する予定です。
本年２月に新築工事が始まり、順調に工事が進んでいます。
移転後は閲覧・展示スペースが大きく改善される見込です。

寄贈・寄託図書等の紹介

●校本うつほ物語草稿

今年５月、上坂信男氏を通じ、故笹渕友一氏のご遺族から、「校本うつほ物語草稿」50冊の寄贈を受けました。本草稿は校異本と註解本の二種類に分かれ、校異本の初巻のみ、『校本うつほ物語　俊陰巻』（西村宗一，笹淵友一校　昭和15年　興文社刊）として刊行されました。諸本から収集された膨大な異文や書入注記が詳細に書き込まれている貴重な資料で、『うつほ物語』の研究集成として高い価値があるものです。現在活用に向けて、保存利用の方法などについて検討しています。

●坂田穏好氏蔵古筆切コレクション

伝藤原定家等筆『千五百番歌合』

このたび、兵庫県加古川市在住の坂田穏好氏から、氏が収集された古筆切90点余りの寄託（一部寄贈）の申し出を受けました。伝西行筆『朱雀院女郎花歌合』（二十巻本類聚歌合切）、伝藤原定家等筆『千五百番歌合』（本能寺切）、伝源承筆『浜木綿集』（笠間切）など貴重な資料が多く含まれ、古筆切研究にとって価値あるコレクションです。大切に保管するとともに、今後詳細に調査し、広く研究者に、また古筆を愛好する方々への公開を図っていく予定です。

記念切手発売のお知らせ

今年は平安・中世を代表する勅撰和歌集「古今和歌集」「新古今和歌集」が編纂されてからそれぞれ1100年、800年を迎えます。
これを記念して当館から郵政公社に提案した特殊切手が平成１７年９月１日から全国の郵便局で発売されています。

新収コレクション紹介

懐風弄月文庫

今回新収の『新古今集』写本のコレクション（名古屋大学名誉教授後藤重郎氏旧蔵書）61点です。文庫の名称は、後藤氏の蔵書印「懐風弄月書屋清玩」によります。甘露寺親長写本、岩山民部少輔写本など、室町期書写の伝本が中心です。これだけの規模の貴重な『新古今集』コレクションが、まとまった形で研究者・一般の閲覧に供されることの意義は計り知れません。ちょうど『新古今集』編纂から800年に当たる今年、連携展示「うたのちから―古今集・新古今集の世界―」（P３参照）において、本文庫から約30点を展示する予定です。

●リプリント日本近代文学の創刊

当館では、収集した近代文学の文献の中から、良質で研究価値の高いものの影印をオンデマンド方式により継続的に出版し、国内外の幅広い研究者・読者に、できるだけ簡便な形で提供することを開始します。

影印にはデジタルカメラにより撮影した画像を使用し、本文はモノクロ印刷としますが、口絵等、必要に応じカラー印刷を混じえます。また本シリーズの全文画像は当館ホームページ(http://www.nijl.ac.jp)で順次公開を予定しています。

第一期４０点の刊行は、平成１７年１０月を予定しています。（本シリーズは一般書店で入手可能です。）

館長海外往来

当館は、海外研究機関との交流も積極的に行っており、本年度も多数の方が当館を訪問しました。（以下主な訪問者）

松崎碩子（コレージュ・ド・フランス）
マリア・オルシー・テレザ（ローマ大学）
蕭碧珍・陳文添他（国史館台湾文献館）
安平秋・曹亦冰・揚忠他（北京大学）
陳慶浩（フランス国家科学研究センター）
王勇・王宝平（浙江工商大学）
徐一平（北京日本学研究センター）
高木香世子（マドリッドアウトノマ大学）

王勇・王宝平（浙江工商大学）氏との懇談

また、館長も公務として海外との交流促進を図り、８月から９月にかけてオーストリア、オランダ、イタリアを歴訪し、今後の国際交流の発展に努めました。

トピックス

●子ども見学デー

日本文学の次世代への普及を図るため、小学生を対象とした「子ども見学デー」を8月25日（木）に当館大会議室で開催しました。当日は台風11号の接近によるあいにくの天候にもかかわらず約40人の児童及び保護者が参加しました。

「目でみるおはなしーいろいろな絵ー」と題した講義は、文字のない時代から始め、言葉や絵が差違を持ちつつ、共に発展する過程について視覚的に分かりやすく解説しました。

また、「むかしの文字をよんでみよう」と題した講義では、江戸時代における『大岡越前守忠相の日記』など当館所蔵の原史料を使用しながらの説明の後、各児童の名前を和紙にくずし文字（御家流）で書いたものを配付し、昔の文字が身近に感じられると好評でした。

さらに、休憩時間には普段目にしない江戸時代の読物や巻物から現代のマンガ本に至るまで時代とともに変遷してきた多数の本に直接触れるなどして、参加者は昔の本などに親しみました。

伊井館長の挨拶

昔の本を手にとる参加児童

●アーカイブズ・カレッジ

古文書・公文書から音声映像記録・電子記録までの記録史料（アーカイブズ）は、人類共有の文化遺産として、また現代に生かすべき情報資源として、極めて大切なものです。

この記録史料の保存と利用サービス等の業務を担う専門職員（いわゆる「アーキビスト」）の養成のため、当館では昭和63年に「史料管理学研修会」を開設し、平成14年度からはこれを「アーカイブズ・カレッジ」として記録史料の収集・整理・保存・利用等に関する最新の専門的知識・技能の普及に努めています。

平成17年８月29日から当館で開催している長期コース（後期）においては約40人の受講者が自らの知識・技能を向上させるべく日々努力しています。

講義風景

近世史料の整理実習

コ　ラ　ム

古今・新古今の秋

前館長（名誉教授）　松野陽一

この９月１日、記念切手「古今和歌集奏覧1100年・新古今和歌集奏覧800年」が出ました。２年前に国文研から発行申請をしたことでもありますし、図案の打合せに虎ノ門の郵政公社の本社にも行ったりしましたので、各県の中央郵便局では初日に完売というニュースを聞くと、ちょっとうれしくなったりしています。もっとも、中央郵便局には発行記念の特殊スタンプが備えられていたり、切手マニアが集中するからで、我が家の近くの小郵便局では月半ばになった今でもまだ残っているようです。

大体、1000年を超える和歌の表現伝統に関わる社会的アッピール、と研究者は意識していても、現在、一般には、単に古さを有り難がっている、という冷やかな評価の方が大きいと考えておいた方がよいのでしょう。他のテーマの場合も同様ですが、具体的で魅力的な研究者からの発言が必要なのだと思います。

これはもう、人材豊富な国文研の現役の皆さんにお願いするしかないので、この国文研ニュースの今後を楽しみにしています。私の乏しい経験の工夫の１つでは、現今だれでも使っている「かな」や「片カナ」が、古今集の100年程前に発明され、それ以来、1200年にわたって使用され続けていること、古今集で「かな表記」が深められたことが、その後の言葉や文章の歴史に大きな役割を果したことに及ぶと、やや、古今集に関心を寄せてもらえたことが何度かあったことを記しておきましょう。

引退以来、調子を崩していましたが、「秋の気配の入り立つままに」回復、１０月からの「古今集から新古今集へ」の５回の連続講演、１１月のソウル研究交流集会でも国文研のお手伝いをするつもりで、準備をしています。長らく休眠していた俊成全歌集、幾つかの影印叢書の解題も再開しましたし、論文にもやっと手をつけ始めました。何とも遅々たる営みですが、静かな喜びにひたれる日々を有り難く思っています。

国文学研究資料館ニューズ　No. 1

発行日　平成１７年１０月１８日
編　集　広報委員会
発　行　人間文化研究機構　国文学研究資料館
National Institute of Japanese Literature
〒142-8585　東京都品川区豊町１－１６－１０
TEL:03-3785-7131 Fax:03-3785-4452 http://www.nijl.ac.jp
印刷所　有限会社　スミダ
©人間文化研究機構　禁無断転載